## 「衣更着(きさらぎ)に思う～頭の下がる世界」

### ●厳しさと優しさ

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中、私たちは改めて自分の生き方、「いのち」を見つめ直すことになったと思います。

しかしまた、そのことを通して、私の「いのち」を本当に育てることにもなるかもしれないと思います。

教育心理学などでは、父性原理と母性原理ということをいいます。適度な厳しさと適度な優しさと出遇うことにより、「いのち」は社会の中で、ある方向に向かって健全に育つといいます。

このことは、仏教の教え、仏さまの御法話の中で様々に語られていました。

厳しさ、つまり、「さとり」の智慧に出遇う時、私たちは、自分の思い上がりに気づかされます。

また一方、優しさ、つまり、「さとり」の慈悲に出遇う時、様々な出来事にお陰さまだったと気づかされます。

もちろん、智慧も慈悲も「さとり」の道理のおはたらきです。

### ●念仏者のお母さんの言葉

東京の法善寺前ご住職･武蔵野大学名誉教授の山崎龍明(りゅうみょう)先生のご法話の中に、富山県の念仏者のお母さんの逸話が耳の底に残りました。

生まれながら身体の具合の悪い娘に、「お母さん、どうして私を丈夫な人間に生んでくれなかったの?」と問われたそうです。
昔の念仏者で、芯が通っているお母さんは、
「お前ね、一度おぎゃあと生まれたら、この世に、思い通りになることなんて一つもないよ。
よお、寺に参ってそのことを聞かせて貰えや」
と答えたられたそうです。
神様にお願いしたり、お札(ふだ)を貰ったりしても、何一つ思い通りになることはないんだよ、そのことを本当に、身をもってうなずける私に育てられるまで、寺に参ってよおく聞かせて貰うんだよ、ということでしょう。
娘さんは若い頃、その言葉に納得できなかったけれど、七十歳過ぎてようやっと分かりかけてきます。けれども、学問もない母からなぜあんな言葉が自然に出たのだろうと思いました。
しかし、それが道理にめざめる、信心の生き方だということでした。

### ●頭が下がると開かれる世界

二〇〇八年、京都の六角会館で開催された如月忌(きさらぎき)の法話で、親鸞聖人の説く諸仏について、元龍谷大学学長、故･信楽峻麿(しがらきたかまろ)先生から、次のような御法話をお聞かせいただきました。

親鸞聖人は、自分を育ててくださった法然上人は、お浄土から娑婆に来て、私を育てて下さった仏さまであると和讃などに明かされています。
一方、『阿弥陀経』には、十方の仏が、私にお念仏を勧めてくださるというけれど、具体的にはどういうことなのでしょうか。
親鸞聖人は、私の称える念仏は、先ず、如来さまの呼び声だと言われます。そしてまた、私をお念仏の教えに引き入れ、導き、念仏の人生に育てて下さった方は、仏さまであると示されます。
極端な話ですが、仏教にまったく縁のなかった人がいたとします。
その人が、仏法の悪口を、本願寺の悪口を言っていたとします。しかし、本当にそうなのかなという思いが私に生まれて、仏法を聞いて、やがて、お念仏するようになったならば、その人は諸仏かもしれません。
私たちは、様々なご縁の中で心が育てられています。
それぞれの人生の中で色んな出来事に出遇いますが、教えを聞いている方なら、何が価値があり、価値がないのか、そう簡単には言い切れないのではないでしょうか。
どうしようもなく情けない辛い出来事であったとしても、どこかでそれが逆に肥やしになって、その人の人生の幸せを生みだしてくれているかもしれません。
これは、どこまでも、自分の信心において、そう言えることであって、人に押しつけることではありません。念仏生活の中で、一人ひとりがそう受け止められるかどうかが大切です。
私たちを仏法に引き入れてくださったものは、人生の中に様々あったなとこの私の頭が下がる、つまり、南無するところに、心豊かにお陰さまだったと味わいとる、安らいの世界があるということでしょう。

いずれも私の心に残ったままを記しました。とても厳しい言葉です。しかし、こうした言葉を抜きにしたまま、いくら仏法を聞いても、私の心には響くものがないように思われました。

厳しい寒さで、更に一枚着る月だから、二月のことを衣更着(きさらぎ)というそうです。厳しさの中に、温かさを味わう深い言葉だと受け止めています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。